

埼玉県戸田市・千葉県印西市における「自治」の諸相（1）

——地勢・歴史・地域のすがた

川手 横 [かわてしょう]

後藤・安田記念東京都市研究所主任研究員

小石川裕介 [こいしかわゆうすけ]

後藤・安田記念東京都市研究所研究員¹⁾

1 はじめに

後藤・安田記念東京都市研究所研究室では、人口が急増している自治体の政治・行政・地域社会の実態を明らかにし、地域における「自治」の動向をつかむため、埼玉県戸田市および千葉県印西市で、2017年8月から2018年3月にかけ、それぞれ断続的に延べ23日間（戸田市）、24日間（印西市）にわたる調査を実施した。調査においては、両市内各所にて現地視察を行うとともに、市長・副市長・教育長・部課長級幹部職員をはじめとする行政担当者・議員・地域住民などそれぞれ計72人（戸田市）、62人（印西市）に対しヒアリングを行った。本稿は、その調査の中間報告の第一弾にあたる。中間報告は複数の論文にわたるため、本誌次号以降引き続き掲載する予定である。なお、2016年度には人口減少に直面する自治体（徳島県那賀町）において同様の調査を実施した。その成果は、本誌2017年7月号から12月号に連載されている。

2 戸田市および印西市の地勢・歴史・人口

埼玉県戸田市および千葉県印西市はともに関東大都市圏のなかにあって人口増加率が高い都市であるが、その様相は大きく異なる。誤解を恐れず簡潔に表せば、戸田市は、埼京線の開通を契機として都心部へのアクセスの良さから、いわば「自然」と人口が増加していった都市といえる。これに対して、印西市は、千葉ニュータウン事業によって開発された

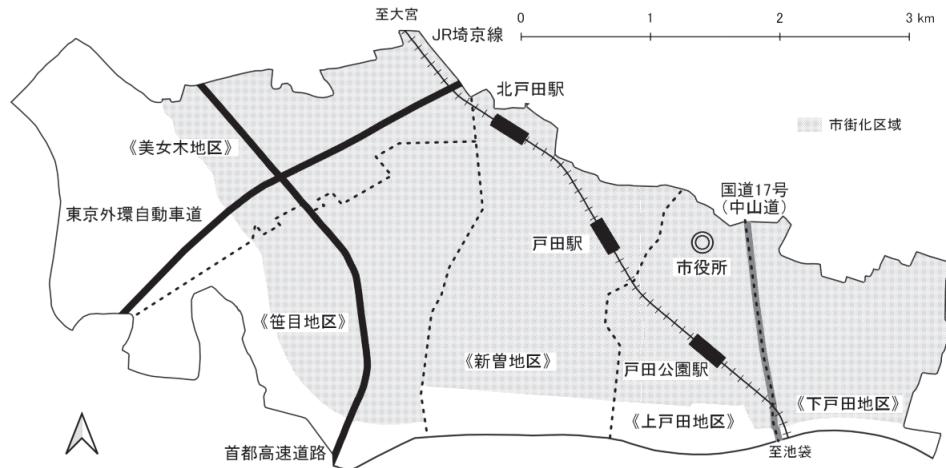
こともあり、ある種「人工」的な発展が見られる都市である。人口増加という共通項はあるものの、前提とする条件や抱えている問題には異なる部分も多い。このため、本節ではその差異に着目しながら、両市の地勢・歴史・人口について概観する。

（1）地勢

戸田市（図1）は、埼玉県の南西部に位置する人口約14万人の都市である。1957年に戸田町と美篶村が合併し、その2年後に一部地域が分離して現在の市域となった。さいたま市南区・蕨市・川口市と接し、また荒川を挟んで朝霞市・和光市および東京都板橋区等と接する。土地は平坦で、荒川河川沿い（公園区域を含む）以外はほぼ全域が市街化区域に指定されている。1985年の埼京線開通を契機に全域でベッドタウン化が進行し、近年では特に市東部の中山道沿いで中高層マンションの増加が顕著である。都心へのアクセスが良好で、新宿駅まで20分台で到着可能なためである。また市西部には首都高速道路、国道バイパスおよび東京外環自動車道があり、陸路の便も良いため工場および物流倉庫も数多く見られる。林野は存在せず、耕地もほとんど残っていない。

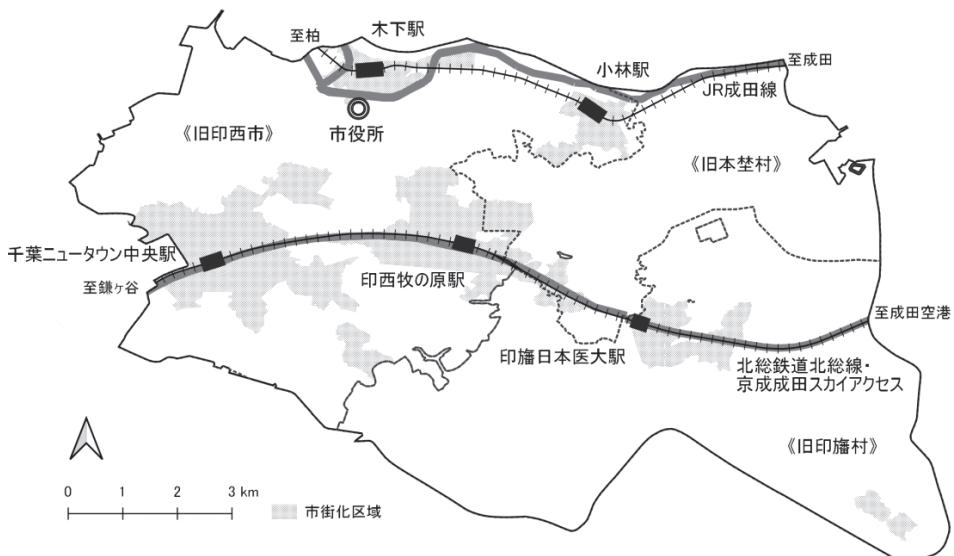
印西市（図2）は、千葉県北部に位置する人口約10万人の都市である。2010年に印西市が本塙村および印旛村を編入合併し、現在の市域となった。西は我孫子市・柏市・白井市、南は八千代市・佐倉市・酒々井町、東は成田市・栄町、また北は利根川を挟んで茨城県に接する。土地は平坦な台地と、北

図1 埼玉県戸田市



出典) 国土数値情報および地理院地図より筆者作成

図2 千葉県印西市



出典) 国土数値情報より筆者作成

部の利根川沿いおよび東部から南東部の印旛沼干拓の低地から構成される。戦前期に利根川の水運にて栄えた木下周辺を除けば、もとは山林と田畠が広がる農村地帯であった。しかし、1984年より入居が始じまつた千葉ニュータウン事業により様相は大きく変化する。域内では千葉ニュータウン中央地区・印西牧の原地区・印旛日本医大地区と3箇所が開発され、現・北総鉄道の駅もまた整備されることとなった。印西市の市街化区域はこの3地区とJR成田線の2駅周辺が中心である。これらの地区以外につ

いては、おおむね山林や耕地の風景を残している。ニュータウンから都心へのアクセスは鉄路にて直通の1時間弱であるが、ニュータウン開発のため建設された北総鉄道の運賃は比較的高額であり、沿線住民の大きな負担となっている²⁾。

2市を比較してまず気づくのは、平成の合併を経験しなかった戸田市の相対的狭小さである(表1)。市域も、荒川で隔てられた箇所を除けば、隣接する蕨市等との市境に気づくのは難しい。まちなみ等についても、印西市に比較すれば、およそ均一的であ

表1 埼玉県戸田市および千葉県印西市の比較

	戸田市	印西市
2015年人口（人）	136,150	92,670
人口増加率	10.62%	5.10%
面積（km ² ）	18.19	123.79
市街化区域面積（ha）	1,337	1,907
市街化区域人口（人）	136,109	74,415
耕地面積（ha）	5	4,160
林野率	-	15.03%
1次産業割合	0.17%	4.14%
2次産業割合	23.01%	16.86%
3次産業割合	76.82%	78.99%
持ち家比率	48.32%	85.17%

出典) 国勢調査(2015)、全国都道府県市区町村別面積調(2017)、作物統計調査(2017)、農業センサス(2015)、データいんざい(2017)、統計とだ(2017)より作成。人口増加率については、2010年から2015年のもの。

る。

一方、印西市は相対的に広域であり、また域内でもニュータウン地区とそれ以外の地区の差異が顕著である。そしてより重要なのは、市内でもニュータウン地区のみに人口が集住していないという点である。市域のニュータウン地区人口が54,111人(58%)であるのに対して、非ニュータウン地区は38,559人(42%)である(2015年国勢調査)。これに加えて非ニュータウン地区も一様ではなく、旧本塁村のような農村的要素が強い地域もあれば、JR成田線の木下駅および小林駅周辺や旧印旛村平賀学園台等、宅地開発が行われている地域も見られる。

また2市の持ち家比率に大きな開きがあるのも特徴といえる(表1)。埼玉県と千葉県の持ち家比率はそれぞれ67.04%、65.99%(2015年国勢調査)であるから、戸田市は県平均よりも20%近く低く、反対に印西市は約20%高いこととなる。これは、後述する人口動態に関する2市の特徴に大きく影響しよう。

(2) 合併と歴史

① 埼玉県戸田市

戸田市は現在5地域に分かれる(前掲図1)。このうち下戸田・上戸田・新曾は明治の合併以前の集落単位である。3村は町村制施行に伴って合併し、

1889年に戸田村となった。1940年には町制が施行されている。この戸田町地域は、新曾は農業を中心であったが、下戸田・上戸田は中山道沿いであったため、商家および工場労働者も多く見られた。

笛目・美女木は、それぞれ明治の合併にて成立した笛目村・美女木村の村域が主である。両村は1943年に戦時合併をし、美女木村となった。戸田町域よりも農村的要素が強い地域であった。

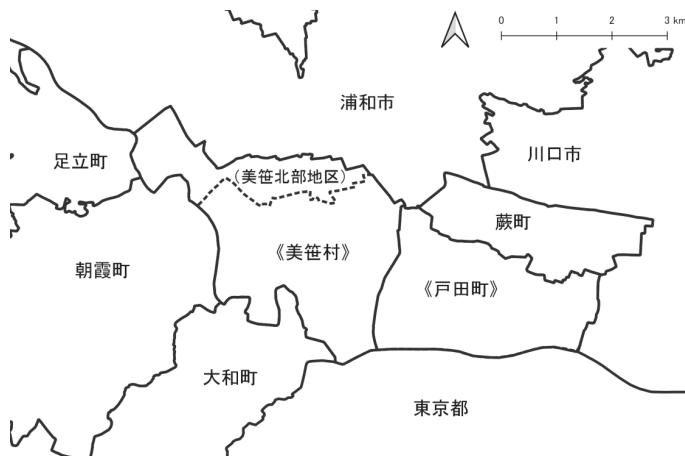
昭和の合併では、埼玉県は町村合併促進法の施行を受けて、1954年に県内の市町村合併に関する試案を作成・公表した。同試案中では、蕨町・戸田町・美女木村の3町村合併が示されている。これに対して蕨町・美女木村は合併に前向きであったが、戸田町は消極的な態度をとった。その一つの理由に、人口規模の問題が推測される。1955年国勢調査では、戸田町が15,941人、美女木村が5,416人であるのに対して、蕨町は35,184人と域内人口の6割以上を占めていた。このこともあって合併協議は遅々として進まず、町村合併促進法の期限を迎えた。

1956年の新市町村建設促進法下では、戸田町の意向が反映され、戸田町・美女木村の2町村による合併協議が進められることとなった。しかし、美女木村内では、浦和市(現・さいたま市)と接する北部地区を中心として、浦和市への合併を望む声も少なくなかった。このため美女木村議会は、合併相手をめぐって紛糾する。新市町村建設促進法の期限が切れた1957年4月になってようやく、戸田町・美女木村の合併および美女木北部地区的合併後の分離が両町村議会にて議決され、同年7月に戸田町が美女木村を編入合併した。旧美女木北部地区的分離については、合併後に同地区住民による小中学校の「同盟休校」がなされるなど、穏やかな推移とはならなかつたが、県の斡旋によって1959年9月に実施される運びとなつた。

合併後の戸田町は、域内に鉄道はないものの、交通網の整備や区画整理の進展の結果、工業化および市街化が進んだ。1955年に町域で19,882人だった人口は、1965年に52,298人まで急増している(国勢調査)。1966年には市制が施行された。

安定成長期には人口は微増傾向となるものの、1985年の国鉄・埼京線の開通により市内に3駅(戸田公園駅・戸田駅・北戸田駅)が設置されると、東京都心部および埼玉県中心部へのアクセスが飛躍

図3 1955年現在の戸田町・美笹村と周辺自治体



出典）国土数値情報より筆者作成（一部改変した）

的に良くなり、急激なベッドタウン化が進行した。戸田市では2015年まで30年間で年平均2.56%の人口増加が継続した結果、1985年に76,960人であった人口は2015年に136,150人となっている（国勢調査）。

平成の合併では、2001年に埼玉県が公表した合併要綱において、県南の5市を中心とした合併パターンが示された。この5市は、戸田市・蕨市・川口市・鳩ヶ谷市・草加市で、1983年より「埼玉県南5市まちづくり協議会」として継続的に交流がなされていた地域であった。示された合併パターンは、これら5市・草加市を除いた4市、戸田市および蕨市の2市の3種である。このうち合併協議は、4市の枠組みにて進められることとなった。

戸田市における住民アンケートでは、当初合併賛成と反対が拮抗していた。これに対して、市執行部は合併に対してどちらかといえば消極的であった。理由は、財政および人口規模である。戸田市は1980年代から不交付団体となっており、2001年の財政力指数は1.17であった。また当時の市長は、行政サービスの点から、10~20万人が都市の適正規模と述べている。その後2002年7月に実施された「戸田市市民意識調査（第8回）」では、合併について「必要と思わない」が69.3%、「必要と思う」が9.6%という結果となり、合併反対が多数を占めることとなった。この結果を受け、戸田市は4市協議の枠組みから離脱することとなった。

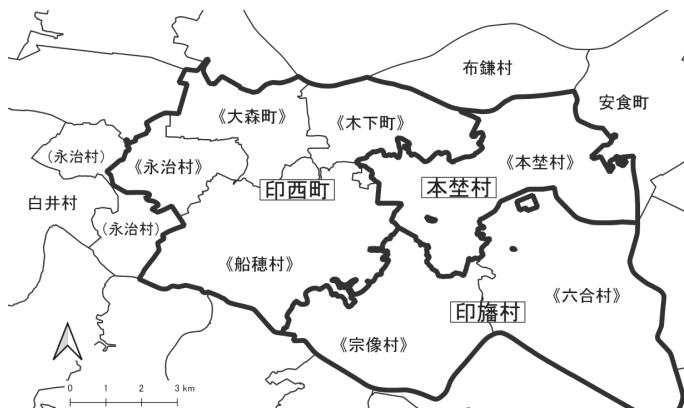
②千葉県印西市

印西市は現在、平成の合併による旧3市村およびニュータウン／非ニュータウン地域（前掲図2）で分類されることが多いが、昭和の合併以前の旧町村単位で把握されることもある。木下町・大森町・永治村・船穂村が旧印西市域、六合村・宗像村が旧印旛村域であり、また本塙村は大正期に合併して以来その村域を維持してきた。

このうち、木下および大森は商工業が発達した地域であり、特に木下は利根川の水運によって戦前期に栄え、1901年には成田鉄道成田線の2駅が設置されている（木下駅・小林駅。なお、1920年に成田鉄道は国有化された）。他の村々は基本的に山林と田畠の広がる農村地帯であったが、特に東部域から南東部域にかけては、昭和期まで続いた印旛沼の干拓事業によって田地が整備されている。

昭和の合併では1953年に木下町・大森町の合併が、県の町村適正化モデル地区として指定されたが、同協議は新町名と役場位置を巡って対立し、破談に終わった。しかし同年、両町はより大規模な合併が必要だとして、印旛郡西部9町村の合併を提唱した。この結果として、木下町・大森町・船穂村・永治村・白井村という5町村による、新たな合併協議の枠組みがつくられることとなった。その後の協議の中で、白井村は永治村との2村合併へと議論が傾いた結果、永治村は分村することとなり、1954年に2町2村合併の印西町、2村合併の白井村が生

図4 印西市域における昭和の合併と周辺町村



出典) 国土数値情報より筆者作成

まれた。

本塙村・六合村・宗像村では、先に述べた9町村合併等、様々な合併枠組みが模索されたが、1953年頃より本塙村・安食町・布鎌村・六合村・宗像村との5町村合併案が進んだ。しかし、同協議は、本塙村の内部対立によって実現しなかった。本塙村は大正期に合併を行ったが、そのときの旧村間の対立が再燃したためである。結局、先の5町村合併案は、問題を抱えた本塙村を除いたかたちとなり、1955年に六合村・宗像村が合併して印旛村に、安食町・布鎌村が合併して栄町になった。

その後、本塙村は合併先をめぐって内部の対立が激化する。村内で印西町・印旛村・栄町の各町村との合併派に分かれたため、一時は分村を前提に合併が議論され、これを問う住民投票も実施された。また村執行部は、印西町との合併を志向し、印西町長との連名で県に合併請願書を提出するなどしている。しかし、ついぞ村内の意思統一をすることはできず、1959年に村議会で本塙村単独での存続を決定することとなった。

昭和の合併後の高度成長期には、現印西市域の人口は減少傾向にあった。1955年に31,708人だった人口は、1970年には28,011人まで減少している(国勢調査)。主たる理由は人口流出による。

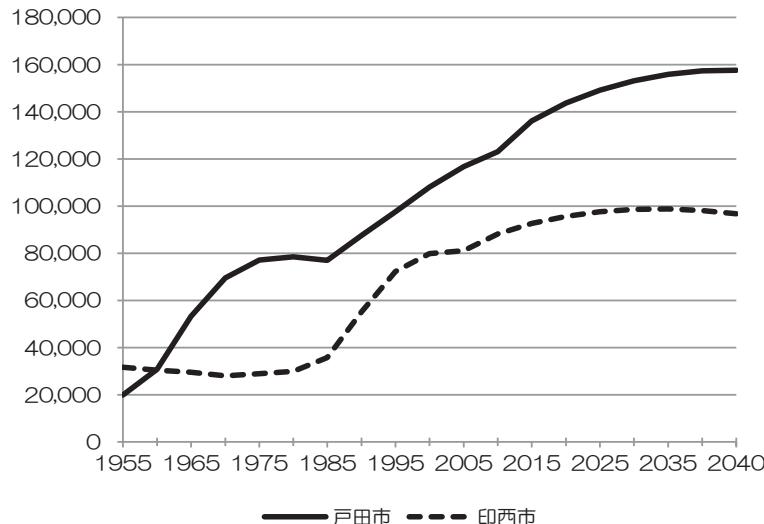
千葉県が「千葉ニュータウン計画」を発表したのは、このような状況下であった(1966年)。白井町・船橋市・印西町・本塙村・印旛村の1市2町2村にまたがる北総台地上に、1967年から10年計画

で人口34万人の新都市を建設するという壮大な計画であった。都心への通勤路線も新たに建設されることとなり、また中心地域は印西町となった(千葉ニュータウン中央)。しかし同事業の進捗は大幅に遅れ、これに伴って計画は大幅な縮小と延長を余儀なくされた。たとえば最終的な計画人口は143,300人まで縮小されている。

入居は西部の白井・船橋部分からはじまり、印西町での入居は1984年より開始された。そしてニュータウン部の人口増加は、そのまま印西地域の人口増加につながった。1985年から1995年の10年間で、地域人口は35,745人から72,278人とおよそ2倍となっている(国勢調査)。1996年には印西町は市制を施行しており、その後も継続的な人口増加が見られる。ニュータウン事業進捗の遅れが、結果的にはあるが、息の長い人口増加傾向を地域に形成したといえる。なお、ニュータウン地区の開発に並行するように、地域北部の成田線沿い、また印旛村南東部の平賀学園台の宅地開発が1960年代後半から80年代にかけて実施されている。

平成の合併では、「千葉県市町村合併推進構想」(2000年)により、2002年より印西市・白井市・印旛村・本塙村・栄町の2市1町2村の枠組みにて合併協議が開始された。このうち栄町は、隣接する成田市との合併を希望して協議会を脱退する。残った2市2村は枠組みを維持して協議を進め、「北総市」として新設合併の直前まで進んだ。しかし2004年に白井市が住民投票を行い、合併反対が投票の3分

図5 戸田・印西市域の人口推移と将来推計人口



出典) 2015年までは国勢調査、2020年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」(2018年推計)のデータを使用し筆者作成

の2を占めた結果、白井市は協議を離脱し、合併協議会は一度解散に追い込まれた。

この後2006年に印旛村・本塙村の村長・議長の連名にて、印西市長・議長に対して合併要望書が提出された。両村の将来的な財政不安がその動機の主であった。このとき印西市は不交付団体だが、印旛村および本塙村の財政力指数はともに0.5前後であった。この要望書が契機となって、2009年1月に印西市・印旛村・本塙村の1市2村の枠組みで法定協議会が設置された。新市名称等にて多少の紛議はあったものの、以前の協議会の成果もまだ残っていたため、合併協議は比較的順調に推移した。なお、白井市が抜けたため、合併方式が新設から編入合併へと変更されている。

しかし、協議が進行するとともに、突如として本塙村村長が合併反対を主張するようになった。村財政の好転がその理由であったが、2006年に連名にて合併要望書を出したのも同村長であったため、本塙村内では村長と議会の深刻な対立に陥った³⁾。議会が村長の不信任案を審議しようとすると、村長は対抗して議会を招集せず、村政は混乱した。結局リコールが実施され、村長が解職されることになった。ただし同騒動の合併協議そのものへの影響はそれほど大きくなく、2010年3月に印西市は印旛村・本塙村を編入合併している。

(3) 人口推移・構成および人口動態等

①人口推移と構成

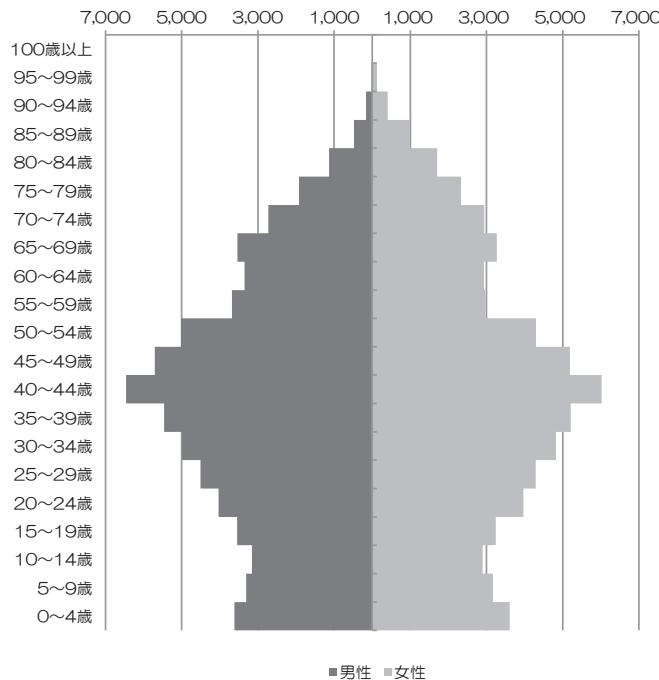
埼玉県戸田市および千葉県印西市はともに現在も人口が増加傾向にある自治体である(図5)。戸田市域は高度成長期に大きく人口増が見られ、安定成長期に入ると微増となったが、先に述べたように埼京線開通(1985年)後は継続的な人口増となっている。印西市域では、80年代まで人口減にあったが、ニュータウン入居開始(1984年)後は急激な人口増が見られ、現在でも増加傾向にある。将来推計人口においても、両市とも2030年代まで増加傾向が見られる。

両市とも人口増の自治体であるが、その人口構成は両市で大きく異なる。戸田市は第2次ベビーブーム世代前後が突出して多くなっている(図6)。やや変形的ではあるが「星型」の人口構成であるといえよう。一方、印西市は第1次および第2次ベビーブーム世代が多く、比較的全国平均に近い「つぼ型」の人口構成といえる(図7)。なお、2017年4月1日現在の両市の平均年齢は、戸田市が39.77歳⁴⁾、印西市が43.6歳⁵⁾で、ともに県下では平均年齢が低い自治体となる。

②人口動態

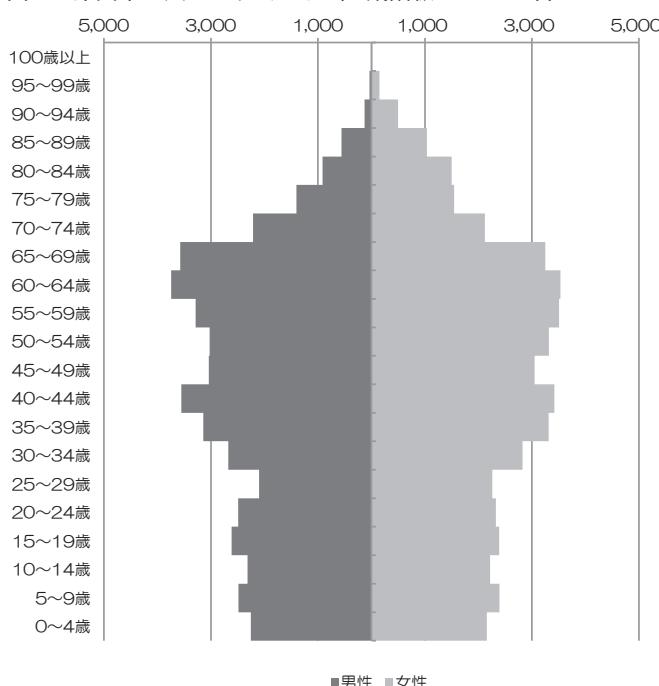
2市転出入による社会増減を年齢別で比較する

図6 戸田市の人口ピラミッド（5歳階級・2015年）



出典）国勢調査結果より筆者作成。以下図11まで同様

図7 印西市の人口ピラミッド（5歳階級・2015年）



と、より特徴的である（図8）。戸田市は20歳代から30歳代の社会増が中心であるのに対して、印西市は30歳代から40歳代前半および10歳代未満の社会増が目立つ。そして印西市では20歳代は社会減となっている。

これは、先述した2市の持ち家比率の特徴と無関係ではないと考えられる。すなわち、持ち家比率の高い印西市は、比較的経済的余裕が生まれてくる30歳代に家やマンションを購入し、夫婦または子とともに転入してくる傾向があると推測される。20歳代の社会減は、進学や就職に伴う転出が主となるだろう。一方、戸田市は賃貸住宅が豊富で、また都心へのアクセスも良いため、比較的若い転入者が多く、社会増を形成していると考えられる。また、人口流动性も戸田市のほうが高い。同データにおける転出入者の総数を比較すると、戸田市では転入が23,475人、転出が17,218人であるのに対して、印西市は転入14,001人、転出が8,644人に留まる⁶⁾。

転入元および転出先に関しては、両市について同様の傾向が見られる（図9、10）。戸田市は東京都および他府県からの転入者割合が多いが、他府県について具体的に見ると全国各地から転入していることがわかる。なお、両市ともに自市内の移動も少なくない。

通勤・通学先については、戸田市在住者が東京都内を通勤・通学先としているのが目立つ（図11）。一方、ニュータウン事業により人口増加を見た印西市ではそれほど東京への通勤・通学は多くないといえるが、これは都心への距離および時間を考慮する必要があるだろう。

3 国勢調査小地域集計にみる地域のすがた

本節では、国勢調査の結果のうち、町丁・大字単位で集計された小地域集計のデータを利用して、戸田・印西両市の地域の

図8 戸田市および印西市の年齢別純移動数（5歳階級・5年前の常住地比較）

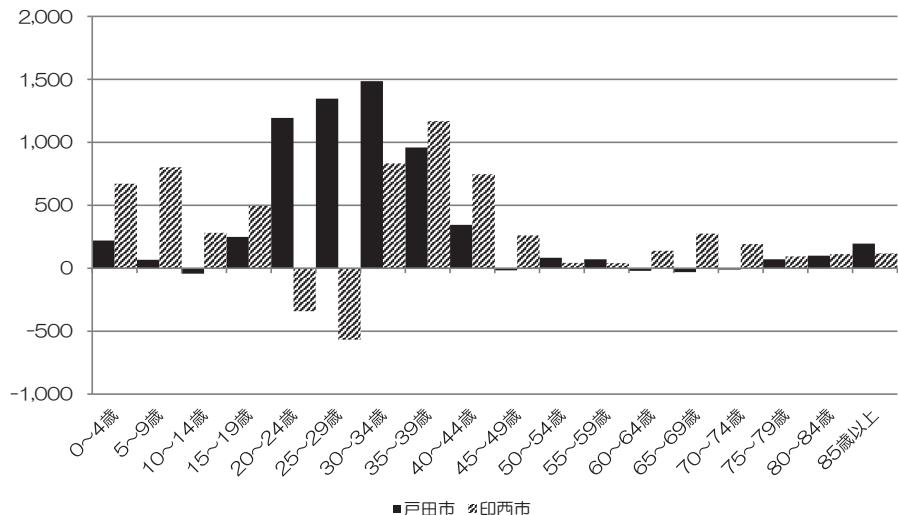


図9 戸田市および印西市の転入5年前の常住地割合（2015年）

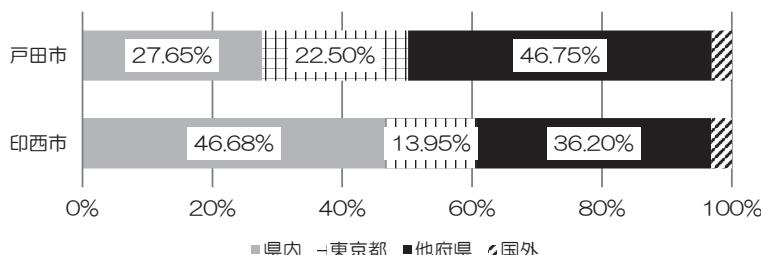


図10 戸田市および印西市からの転出先割合（2015年）

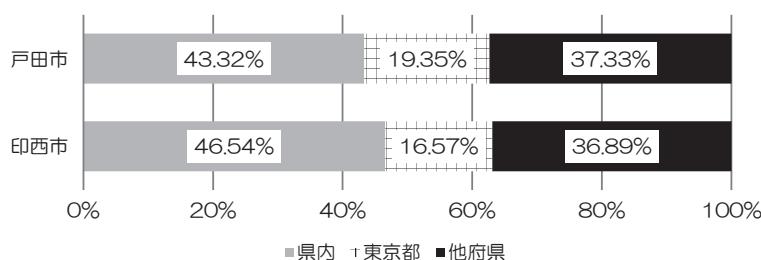


図11 戸田市および印西市在住者の通勤・通学先割合（2015年）

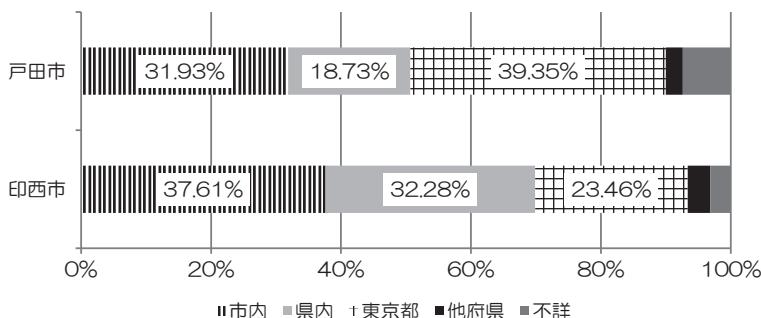


表2 15歳未満人口比率と65歳以上人口比率（戸田市）

	人口総数	15歳未満 人口	比率	65歳以上 人口	比率	一般 世帯数	65歳以上 世帯員のみ 世帯数	比率	65歳以上 単身世帯数	比率
下戸田	38,849	5,592	14.4%	7,082	18.2%	16,790	2,622	15.6%	1,502	8.9%
上戸田	32,111	4,325	13.5%	4,622	14.4%	14,612	1,582	10.8%	885	6.1%
新曽	31,816	4,990	15.7%	4,176	13.1%	13,900	1,395	10.0%	842	6.1%
笛目	19,394	2,702	13.9%	3,700	19.1%	7,963	1,200	15.1%	590	7.4%
美女木	13,939	2,149	15.4%	2,163	15.5%	5,978	665	11.1%	329	5.5%
計	136,150	19,758	14.5%	21,764	16.0%	59,243	7,464	12.6%	4,148	7.0%

出典) 国勢調査結果より筆者作成。以下本節の図・表はすべて同様

すがた——住民の年齢構成、世帯構成、住居の形態——を小さな単位で明らかにし、合わせて両市の比較を試みる。使用するのは国勢調査（2015年）のデータである⁷⁾。

論を進めるにあたっては、すでに行政などによって利用されている区分も参考にしつつ、以下の地区分けを採用する⁸⁾。

戸田市：下戸田、上戸田、新曽、笛目、美女木
印西市：木下、小林、大森、永治、船穂、NT中央駅北、NT中央駅南、NT牧の原駅、印旛、NT印旛、本塙、NT本塙

戸田市の5地区は、前節で述べたとおり、おおむね明治の合併以前の旧村である。対して印西市の地区は、NTと書かれているのはニュータウン地域を主に鉄道駅あるいは2010年合併前旧村を基準に分けたものであり、印旛・本塙の2地区はこれも承前のごとく2010年合併前旧村、そして木下～船穂の5地区のうち小林以外は昭和の合併前旧村、小林は明治の合併前旧村（明治の合併で木下村となった）である。

(1) 少子・高齢化の状況

まずは戸田・印西市における少子・高齢化の状況を見ていきたい。手始めに、戸田市の地区別15歳未満人口比率と65歳以上人口比率（以下、高齢化率）を表2に示す。

15歳未満人口比率が最も高い地区は新曽で15.7%であるが、最も低い上戸田でも13.5%と、地区間の開きはさほど大きくなない。高齢化率は笛目（19.1%）と下戸田（18.2%）の両地区においてやや高めで、最小は新曽の13.1%である。ただし、美女木につ

いては、地区内に高齢化率の極端に少ない（しかも相当の人口規模をもつ）大字・町丁目（以下、単に丁とする）が存在しており（美女木東1：3.2%、大字美女木：7.6%）、便宜的にこれを除いて計算すると、比率は20.5%と笛目を上回る高さとなる。よって、美女木・笛目・下戸田がやや高齢化している地区であると言える。

丁別に見ると、15歳未満人口比率が20%を超えているのは下前1（以下も「○丁目」は単に数字のみで表記する）、川岸1、美女木東1、大字上戸田である。これらの丁にはいずれも大規模なマンションが建っており、そこに子育て世代が多く住んでいることが想像される（ちなみに、上述の美女木東1や大字美女木の高齢化率の低さも同じ理由で説明できるだろう）。

高齢化率が30%を超える丁は喜沢南2、戸田公園、新曽南4、早瀬2であるが、このうち新曽南4、早瀬2は、当該町の人口に占める施設世帯人口が2割を超えており、丁内に立地する特別養護老人ホームなどの高齢者施設の影響が推測される。喜沢南2も、施設世帯人口が6.6%となっており、同じように高齢者施設が立地している。

丁別の15歳未満人口比率の平均値は13.7%、高齢化率の平均値は17.9%である。そこで、全丁について、高齢化率のみが平均値を超える（高齢）／15歳未満人口比率のみが平均値を超える（子ども）／両者とも平均値を超える（混在）／両者とも平均値を超えない（中立）の4類型に分け、地区別に丁数を見ると、表3の通りとなる。高齢化が相対的に進んでいる下戸田・笛目・美女木の中でも、笛目については一定の若年層が存在していることが読み取

れる。上戸田と新曽はいずれも15歳未満人口比率の高い丁が多いが、上戸田は「中立」、つまり15歳未満人口比率も高齢化率も丁別平均より低い丁が多く、新曽の方がより若年人口の集中の度合いが高いと言えるだろう。

次に印西市であるが、戸田市と見比べてみてすぐ気付くのは、地区間のばらつきの大きさである（印西市については、地区数が多いことから、便宜のために比率の降順の順位を示した [表4]。以下同様)。15歳未満人口比率の最小は印旛の7.1%、最大は同じ印旛のNT地区で23.6%となっている。以下、15歳未満人口比率が高い地区には基本的にNT地域が並んでおり（牧の原駅、中央駅南、NT本塁、中央駅北）、対して低い地区には、非NT地域が連なる（低い方から印旛、永治、大森、本塁、小林、木下）。

非NT地域の船穂が20.3%と高い比率を示しているのが異質だが、これは、同地区内にあってNTに隣接している草深において、住宅開発が急激に進んでいるためである（草深は2010年の国勢調査では536世帯1,826人だが、2015年の調査では1,073世帯3,634人とほぼ倍増している）。草深の人口の船穂地区全体に占める割合は66.7%にものぼり、15歳未満人口比率は26.1%と圧倒的に高い。そこで便利的に草深を外して算出すると、船穂の15歳未満人口比率は他の農村地域と同程度の8.6%まで低下する。

また、NT中央駅北の比率（14.9%）は、木下のそれ（13.0%）とさほど開きがなく、同じNT地域でも、子育て世代の多い地区とそうでない地区があることがわかる。この偏在傾向は、実際には地区単位ではなく丁単位で観察される。NT中央駅北で見ると、15歳未満人口比率の最小は木戸1の5.0%、最大は木戸7でこちらは実に40.5%である（木戸の他の丁はいずれも10%を超えない）。また、（先述の草深を抱える船穂に加えて）木下、小林といった非NT地区にも、突出して15歳未満人口比率が高い地区が存在する（たとえば木下では木下南2：32.0%、小林では小林北4：39.3%）。これらの丁には、例外なく開発住宅地が存在している（そもそもNT地域は基本的に、丁内の全域がその種の開発地である）。

高齢化率は、基本的に15歳未満人口比率と逆

表3 戸田市各丁の15歳未満／65歳以上
人口比率による分類

	高齢	子ども	混在	中立
下戸田	7	3	0	2
上戸田	2	5	0	7
新曽	1	5	1	3
笠目	5	2	4	1
美女木	6	3	1	0

傾向、すなわち、NT地区で低く、非NTの農村地区で高い。最大は大森の37.3%、最小はNT牧の原駅の9.4%である。こちらについてもやはり、とりわけNTを中心に、地区内の丁単位でのばらつきが観察される。NT中央駅南を例に挙げると、高齢化率の最小は内野3の0.5%であるが、この丁は全域が公園と全寮制大学であり、特異値である。続くのは武西学園台3の2.3%、中央南1の3.0%で、前者は戸建て分譲地、後者は大規模マンションが近年開発された丁である。対して同じNT中央駅南の高齢化率の最大は高花5の30.3%で、これは農村部の白幡（30.3%、永治）、松虫（30.5%、印旛）などと同水準である。他に高花では3丁目が29.1%、6丁目が27.5%と高い数字を示しており、対して2丁目は11.3%、1丁目も16.3%と、同じ町内でも対照的な姿を見せている。

印西についても戸田と同様、各丁を、高齢化率のみが平均値を超える（高齢）／15歳未満人口比率のみが平均値を超える（子ども）／両者とも平均値を超える（混在）／両者とも平均値を超えない（中立）の4類型に分け、地区別に丁数を見た（表5）。

ほぼ「高齢」一辺倒の地区は大森・永治・船穂・印旛・本塁で、いずれも非NT地域である。同じ非NT地域でも、小林と木下では「高齢」が多いものの「子ども」も一定見られる。地区内に開発住宅地が多く立地することが関係しているのであろう。対して、ほぼ「子ども」一辺倒なのが、NT牧の原駅・NT印旛・NT本塁である。これらは、NTの中でも比較的まちびらきが新しい住区が多い地区である（牧の原駅は1994年、NT印旛は2000年、NT本塁は1997年から入居開始）。そして残りは、すでに15歳未満人口比率・高齢化率に地区内で偏りがあると紹介したNT中央駅北・南で、「子

表4 15歳未満人口比率と65歳以上人口比率（印西市）

	人口総数	15歳未満 人口	比率	順位	65歳以上 人口	比率	順位	一般 世帯数	65歳以上 世帯員のみ 世帯数	比率	順位	65歳以上 単身 世帯数	比率	順位
木下	6,502	848	13.0%	7	1,533	23.6%	7	2,535	440	17.4%	6	179	7.1%	6
小林	7,355	842	11.4%	8	1,764	24.0%	5	2,770	522	18.8%	4	214	7.7%	5
大森	5,501	488	8.9%	10	2,051	37.3%	1	2,135	537	25.2%	1	244	11.4%	1
永治	1,425	124	8.7%	11	459	32.2%	3	468	83	17.7%	5	38	8.1%	3
船穂	5,441	1,104	20.3%	2	1,292	23.7%	6	1,613	215	13.3%	10	90	5.6%	8
NT中央駅北	13,720	2,048	14.9%	6	2,473	18.0%	8	4,973	772	15.5%	7	259	5.2%	9
NT中央駅南	19,557	3,292	16.8%	4	3,264	16.7%	9	7,223	1,087	15.0%	8	415	5.7%	7
NT牧の原駅	10,986	2,151	19.6%	3	1,036	9.4%	12	3,875	361	9.3%	12	135	3.5%	11
印旛	8,868	633	7.1%	12	2,674	30.2%	4	2,676	540	20.2%	2	211	7.9%	4
NT印旛	4,827	1,140	23.6%	1	602	12.5%	10	1,603	235	14.7%	9	71	4.4%	10
本塙	3,506	317	9.0%	9	1,236	35.3%	2	1,085	218	20.1%	3	101	9.3%	2
NT本塙	4,982	838	16.8%	5	559	11.2%	11	1,595	171	10.7%	11	51	3.2%	12
計	92,670	13,825	14.9%		18,943	20.4%		32,551	5,181	15.9%		2,008	6.2%	

表5 印西市各丁の15歳未満／65歳以上
人口比率による分類

	高齢	子ども	混在	中立
木下	6	3	1	1
小林	5	4	0	3
大森	3	0	1	1
永治	6	0	0	0
NT中央駅北	4	5	0	5
船穂	6	1	1	0
NT中央駅南	5	9	0	4
NT牧の原駅	0	6	0	2
印旛	12	0	0	3
NT印旛	0	6	0	0
本塙	15	0	1	0
NT本塙	0	4	0	2

ども」の丁が多いものの、「高齢」や「中立」の丁も一定数存在する。中央駅北・南は1984年から入居が始まっており、そのころに開発された丁ではすでに高齢化が相当進んでいる一方、地区内にはそれ以降（現在に至るまで）開発された丁もあるため、このような特性を帶びているのである。

最後に、内容的には次の項にやや食い込むが、両市の65歳以上世帯員のみ世帯比率および65歳以上単身世帯比率の状況について触れておく。地区別のデータはすでに表2・4に示してある。両市とも、基

本的には高齢化率の傾向と目立つて異なる傾向をしてはいない。すなわち、当然と言えば当然であるが、高齢化率が高い地区ほど、65歳以上世帯員のみ世帯比率や65歳以上単身世帯比率が高い。なお、戸田市のデータのうち美女木地区の数字は前述と同様の理由で低く出ており、美女木東1と大字美女木を除外して算出すると、下戸田や笛目と同水準の数字となる（65歳以上世帯員のみ15.6%、単身7.9%）。

本節で見てきた15歳未満人口比率と65歳以上人口比率＝高齢化率の地域的なばらつきの度合いを戸田・印西両市で比較するため、丁ごとの15歳未満人口比率と高齢化率をプロットしたのが図12である。いずれも（とりわけ15歳未満人口比率において）戸田よりも印西の方が数値にばらつきがみられることが視覚的に確認できる。戸田の方が丁ごとの子ども・高齢者の比率のばらつきが少なく、総体的に均質的な空間だと言うことができるだろう。

(2) 世帯の状況

続いて本項では、両市の世帯の姿を、世帯人員数と多世代同居の様態に注目して明らかにする。両市のデータをまず表6に示した。

最初に世帯人員5人以上に注目する。この類型にはまず、核家族でない家族が想定され、核家族ならば子どもが最低3人以上の世帯ということになる。戸田市でその比率が高い地区は笛目である。地区内の丁ごとに見てみると、笛目7が11.4%、早瀬1が

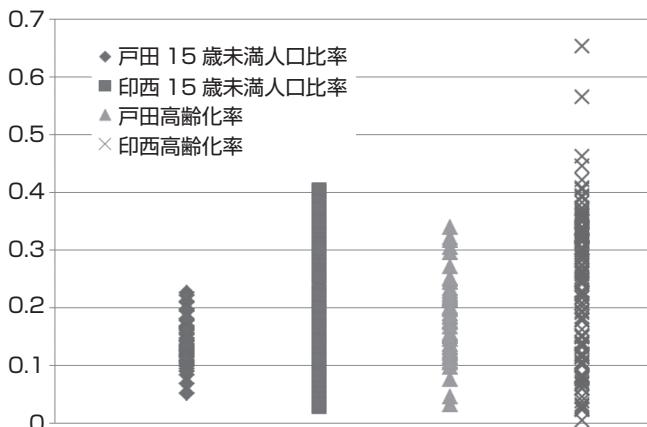
10.3% と 10% を超えており、他にも 8% 台の丁が 5 つ並ぶ（笛目地区の丁数は 12 である）。市域全体に広げても、5 人以上世帯比率が 10% を超える丁は、上の二つの他には美女木 6 (11.2%) のみである。丁別の 5 人以上世帯比率の平均値は 5.6% だが、これを超える丁は笛目で 12 のうち 10、美女木で 11 のうち 7 と、市西部に大規模世帯が集まっている。一方、新曽では 10 のうち 3、下戸田では 12 のうち 2 で、上戸田 (14 丁) には平均を超える丁は一つもない。

表には三世代世帯の比率も示してある。戸田市では、5 人以上世帯比率の傾向とパラレルに、笛目で三世代世帯比率が高い。

丁別の三世代世帯比率の平均値は 3.5% だが、笛目では笛目北町 (3.3%) を除くすべての丁がこれを超えている。他地区では、美女木で 11 丁中 6 丁、新曽も 10 丁中 4 丁で 3.5% を超えているが、下戸田・上戸田で 3.5% を超える丁はそれぞれ一つしかない。市西部に三世代世帯が多く、それゆえに多人員世帯も多くなっているのがわかる。

印西市の 5 人以上世帯比率を見ると、高いのは本塁、永治、船穂、印旛など農村地域であり、これは「農村地域では多世代が同居する大家族が多い」という一般的なイメージと合致するものであろう（これをうけてやや乱暴に踏み込めば、戸田市内で笛目や美女木に三世代世帯が多いのは、全般的な都市化にもかかわらず両地区に「農村的」な家庭が一定残存していることの反映かもしれない）。NT 地域では中央駅北・中央駅南・牧の原駅が最少 3 地区である一方、NT 印旛は 8.5% と木下や大森と同水準であり、NT 本塁は 10% を超えている。合わせて三世代世帯比率も見てみると、NT 印旛や NT 本塁も含めて、NT 地域の各地区は軒並み低水準である。よって、NT 印旛や NT 本塁の 5 人以上世帯比率が高めなのは、多子の核家族が相対的に多いことが影響しているものと思われる。丁別データを見ると、丁別の 5 人以上世帯比率の平均値である 12.0% を超える丁は 50 あるが、そのほとんどが農村地域である。その 50 丁のうち、三世代世帯比率が丁別平均の 11.4% を下回る丁は 6 つ（木下南 2、小林北 4、草深、武西学園台 1、滝野 5・6）あるが、これ

図 12 戸田・印西両市の 15 歳未満人口比率・高齢化率の丁ごとのばらつき



らはいずれも NT 地域か、非 NT 地域でも近年に宅地開発が行われた丁で、多子の核家族が比率を上げていることが推測される。逆に言えば、それ以外の農村地域の丁の世帯人員が多めなのは、やはり多世代同居に起因しているのであろう。

次に、すでに前項の最後で 65 歳以上のそれについては言及した、人員 1 人 = 単身世帯の状況について見ていく。戸田市の地区別の単身世帯比率は上戸田、新曽で 4 割を超え、美女木でも 4 割に迫る。丁別平均は 37.5% で、これを上回る丁が集中するのは上戸田である (14 丁中 11)。他の地区では、下戸田が 5 丁、新曽が 3 丁、笛目で 3 丁、美女木に 4 丁で、5 人以上世帯比率に比べれば地域的偏りは小さい。

印西市で単身世帯比率が高い地区は、高い順に大森、木下、印旛、小林、永治と、いずれも非 NT 地域が並んでいる。第 6 位に NT 中央駅南が入っているが、NT の各地区は基本的に単身世帯が少ない。NT 地域の単身世帯比率の小ささは、これもまた「NT にはファミリー層が多く居住する」という一般的なイメージに添うものであろう。

表中、NT 中央駅南の単身世帯比率が NT 地区のうちではやや高めであるこの背景は、丁別データを見ると明らかになる。印西の単身世帯比率の丁別平均は 16.3% だが、この地区にはそれを超える丁が 9 つ存在する (NT 中央駅北は 4、NT 牧の原駅は 2、NT 印旛は 1、NT 本塁は 0)。そしてそのうち 8 丁までが、内野・原山・高花という千葉ニュー

表6 戸田市・印西市地区別の世帯人員数別世帯数・三世代世帯数

	一般世帯数	世帯人員1人	比率	世帯人員2人	比率	世帯人員3人	比率	世帯人員4人	比率	世帯人員5人以上	比率	三世代世帯	比率
下戸田	16,790	6,001	35.7%	4,168	24.8%	3,223	19.2%	2,655	15.8%	743	4.4%	472	2.8%
上戸田	14,612	5,972	40.9%	3,468	23.7%	2,574	17.6%	2,018	13.8%	580	4.0%	327	2.2%
新曾	13,900	5,607	40.3%	3,118	22.4%	2,425	17.4%	2,105	15.1%	645	4.6%	357	2.6%
笹目	7,963	2,680	33.7%	2,000	25.1%	1,439	18.1%	1,230	15.4%	614	7.7%	354	4.4%
美女木	5,978	2,327	38.9%	1,255	21.0%	1,093	18.3%	927	15.5%	376	6.3%	212	3.5%
計	59,243	22,587	38.1%	14,009	23.6%	10,754	18.2%	8,935	15.1%	2,958	5.0%	1,722	2.9%

	一般世帯数	世帯人員1人	比率	順位	世帯人員2人	比率	順位	世帯人員3人	比率	順位	世帯人員4人	比率	順位	世帯人員5人以上	比率	順位	三世代世帯	比率	順位
木下	2,535	698	27.5%	2	696	27.5%	6	498	19.6%	11	420	16.6%	9	223	8.8%	7	217	8.6%	6
小林	2,770	542	19.6%	4	895	32.3%	2	644	23.2%	6	470	17.0%	8	219	7.9%	9	164	5.9%	7
大森	2,135	679	31.8%	1	610	28.6%	4	398	18.6%	12	257	12.0%	12	191	8.9%	6	197	9.2%	5
永治	468	84	17.9%	5	118	25.2%	11	112	23.9%	5	72	15.4%	10	82	17.5%	2	96	20.5%	2
船穂	1,613	196	12.2%	11	382	23.7%	12	363	22.5%	7	405	25.1%	4	267	16.6%	3	208	12.9%	4
NT中央駅北	4,973	649	13.1%	9	1,643	33.0%	1	1,301	26.2%	1	1,089	21.9%	5	291	5.9%	12	153	3.1%	11
NT中央駅南	7,223	1,263	17.5%	6	2,225	30.8%	3	1,806	25.0%	4	1,465	20.3%	6	464	6.4%	10	236	3.3%	10
NT牧の原駅	3,875	553	14.3%	8	1,071	27.6%	5	996	25.7%	2	1,017	26.2%	3	238	6.1%	11	86	2.2%	12
印旛	2,676	584	21.8%	3	685	25.6%	9	578	21.6%	9	406	15.2%	11	423	15.8%	4	488	18.2%	3
NT印旛	1,603	204	12.7%	10	412	25.7%	8	333	20.8%	10	517	32.3%	1	137	8.5%	8	54	3.4%	9
本塙	1,085	171	15.8%	7	280	25.8%	7	235	21.7%	8	186	17.1%	7	213	19.6%	1	242	22.3%	1
NT本塙	1,595	133	8.3%	12	408	25.6%	10	404	25.3%	3	475	29.8%	2	175	11.0%	5	64	4.0%	8
計	32,551	5,756	17.7%		9,425	29.0%		7,668	23.6%		6,779	20.8%		2,923	9.0%		2,205	6.8%	

表7 内野・原山・高花における単身世帯比率・共同住宅比率・高齢化率

	単身世帯比率	共同住宅比率	高齢化率
内野1丁目	28.0%	100.0%	26.1%
内野2丁目	30.9%	99.8%	26.5%
原山1丁目	16.9%	49.3%	10.7%
原山3丁目	22.1%	98.1%	19.2%
高花1丁目	17.4%	100.0%	16.3%
高花2丁目	27.0%	27.5%	11.3%
高花4丁目	20.1%	100.0%	21.7%
高花5丁目	17.3%	2.9%	30.3%

タウンで初期に開発された地域なのである。この8丁の単身世帯比率・共同住宅比率・高齢化率を並べてみたのが表7である。これを見ると、少なくとも内野1・2と高花4は団地に単身高齢者が多く住み、高花5は戸建に単身高齢者が多く住んでいるのではないかと推察される。

非NT地区の単身世帯比率が高い丁については、

大きく二つのタイプに分けられる。丁別平均16.3%を超える丁のうち、18の丁（木下・木下南1・木下南2・木下東1・木下東2・木下東・別所・平岡〈以上木下〉、小林・小林北2〈以上小林〉、大森・発作・鹿黒南3〈以上大森〉、浦幡新田・高西新田〈以上永治〉、船尾・泉〈以上船穂〉、平賀〈印旛〉）は、丁内の住宅に占める「1・2階建て共同住宅」の比率が丁別平均の3.4%を超えており、これらにはアパートに住む単身者が多いことが推測される。対して、11の丁（白幡〈永治〉、岩戸・師戸・松虫・鎌苅〈以上印旛〉、中根・竜腹寺・酒直卜杭・笠神・安食卜杭・本塙小林〈以上本塙〉）には、「1・2階建て共同住宅」はわずか1棟（岩戸）しか存在せず、これらが純粋に農村部で独居（のおそらくは高齢者）が多い地域であると考えられる。

なお、特異な数字を示している丁のうち、高西新田（86.1%）は建設・造園・廃棄物処理などの業者の敷地が多数を占めていて、小地域集計の職業分類のデータによると、建設・採掘従事者が24人、運搬・清掃・包装等従事者が4人とある（人口46人）ので、おそらく業者の寮のような施設が立地してい

表8 持ち家／非持ち家比率および住宅の建て方（戸田市）

	住宅に住む一般世帯	持ち家	比率	非持ち家	比率
下戸田	16,668	9,110	54.7%	7,558	45.3%
上戸田	14,184	6,418	45.2%	7,766	54.8%
新曽	13,574	5,789	42.6%	7,785	57.4%
笹目	7,772	3,841	49.4%	3,931	50.6%
美女木	5,722	2,829	49.4%	2,893	50.6%
計	57,920	27,987	48.3%	29,933	51.7%

	住宅総数	戸建	比率	共同住宅	比率	低層 (1・2階建)	比率	中層 (3~10階建)	比率	高層 (11階建以上)	比率
下戸田	16,498	4,047	24.5%	12,344	74.8%	2,051	12.4%	6,765	41.0%	3,528	21.4%
上戸田	14,050	2,524	18.0%	11,420	81.3%	1,910	13.6%	7,455	53.1%	2,055	14.6%
新曽	13,472	2,496	18.5%	10,834	80.4%	1,775	13.2%	7,835	58.2%	1,224	9.1%
笹目	7,691	3,094	40.2%	4,463	58.0%	1,766	23.0%	2,456	31.9%	241	3.1%
美女木	5,671	1,912	33.7%	3,715	65.5%	710	12.5%	2,306	40.7%	699	12.3%
計	57,382	14,073	24.5%	42,776	74.5%	8,212	14.3%	26,817	46.7%	7,747	13.5%

るのであろう。鎌刈（63.2%）には大学病院が立地しており、構内にある看護専門学校の寮に住む単身者の影響が考えられる。平賀（45.6%）は、隣接する平賀学園台1に大学が立地しており、そこに通う（多くは単身の）学生の影響だろう。

（3）住宅の状況

次に、前項においてもすでに若干言及した、両市の住宅の状況について明らかにしていきたい。表8に、戸田市における地区別の持ち家／非持ち家の比率と、戸建／共同住宅（低層・中層・高層）の比率を示した。

持ち家と非持ち家の比率は、とりわけ笹目・美女木において拮抗しており、いずれもわずかに非持ち家の比率が高い。上戸田・新曽も非持ち家の比率が上回っており、とりわけ新曽は地区別の非持ち家比率が57.4%と最も高くなっている。持ち家比率が非持ち家比率を凌いでいる地区は、下戸田のみである。

丁別に見ると、全58丁（住宅に住む世帯のない美女木東2を除く）中、持ち家比率が3割を切る丁は美女木東1（29.0%）、本町2（28.8%）、上戸田1（25.1%）、氷川町3（12.5%）の4つである。氷川町3は倉庫が丁域の多数を占める地域で、そこに立地する公務員住宅の影響が大きい。美女木東1にも公務員住宅が立地している。

表9 戸田市各丁の住宅の建て方・持ち家／非持ち家比率による分類

	戸建多／持家多	戸建多／持家少	戸建少／持家多	戸建少／持家少
下戸田	2	1	6	3
上戸田	1	0	2	11
新曽	0	0	4	6
笹目	5	6	1	0
美女木	5	2	1	2

続いて住宅の種類について、戸建の比率は笹目と美女木において高く、それに下戸田が続き、上戸田・新曽は2割を切っている。丁別に見ると、戸建比率が1割を切る極端に共同住宅（＝マンション）が多い丁は、喜沢南1・下前1（以上下戸田）、本町1・大字上戸田（以上上戸田）、新曽南3（新曽）、美女木東1（美女木）の6つである。このうち美女木東1については極めて低い高齢化率と、下前1・大字上戸田については高い15歳未満人口比率と、大規模マンション立地の関係について1項ですでに触れたところである。

丁別の戸建比率と持ち家比率の平均値（31.3%、51.9%）を基準として、それぞれの数値がそれを上回る（多）か下回る（少）かによって各丁を4つに分類し、地区ごとにその数を示したのが表9である。

表10 持ち家／非持ち家比率および住宅の建て方（印西市）

	住宅に住む一般世帯	持ち家	比率	順位	非持ち家	比率	順位
木下	2,514	1,831	72.8%	12	683	27.2%	1
小林	2,759	2,352	85.2%	9	407	14.8%	4
大森	2,127	1,585	74.5%	11	542	25.5%	2
永治	438	419	95.7%	4	19	4.3%	9
船穂	1,597	1,551	97.1%	2	46	2.9%	11
NT中央駅北	4,928	4,411	89.5%	8	517	10.5%	5
NT中央駅南	7,175	5,355	74.6%	10	1,820	25.4%	3
NT牧の原駅	3,814	3,461	90.7%	7	353	9.3%	6
印籠	2,561	2,370	92.5%	6	191	7.5%	7
NT印籠	1,593	1,526	95.8%	3	67	4.2%	10
本塙	1,083	1,059	97.8%	1	24	2.2%	12
NT本塙	1,594	1,490	93.5%	5	104	6.5%	8
計	32,183	27,410	85.2%		4,773	14.8%	

	住宅総数	戸建	比率	順位	共同住宅	比率	順位	低層 (1・2階建)	比率	順位	中層 (3~10階建)	比率	順位	高層 (11階建以上)	比率	順位
木下	2,500	1,885	75.4%	7	592	23.7%	6	510	20.4%	1	82	3.3%	7	0	0.0%	6
小林	2,743	2,431	88.6%	5	293	10.7%	8	287	10.5%	3	6	0.2%	9	0	0.0%	6
大森	2,093	1,608	76.8%	6	473	22.6%	7	385	18.4%	2	88	4.2%	6	0	0.0%	6
永治	435	424	97.5%	3	11	2.5%	10	11	2.5%	5	0	0.0%	10	0	0.0%	6
NT中央駅北	4,911	2,107	42.9%	10	2,793	56.9%	3	18	0.4%	8	1,691	34.4%	3	1,084	22.1%	4
船穂	1,589	1,553	97.7%	2	30	1.9%	11	30	1.9%	6	0	0.0%	10	0	0.0%	6
NT中央駅南	7,141	1,821	25.5%	11	5,319	74.5%	2	9	0.1%	9	3,638	50.9%	2	1,672	23.4%	2
NT牧の原駅	3,804	653	17.2%	12	3,147	82.7%	1	0	0.0%	10	2,258	59.4%	1	889	23.4%	3
NT印籠	2,546	2,398	94.2%	4	142	5.6%	9	142	5.6%	4	0	0.0%	10	0	0.0%	6
NT印籠	1,590	1,009	63.5%	8	580	36.5%	5	10	0.6%	7	197	12.4%	5	373	23.5%	1
本塙	1,075	1,071	99.6%	1	4	0.4%	12	0	0.0%	10	4	0.4%	8	0	0.0%	6
NT本塙	1,593	998	62.6%	9	594	37.3%	4	0	0.0%	10	393	24.7%	4	201	12.6%	5
計	32,020	17,958	56.1%		13,978	43.7%		1,402	4.4%		8,357	26.1%		4,219	13.2%	

る。戸建が多く、持ち家と非持ち家が混在する箇目、戸建・持ち家が多い美女木、共同住宅が多く、持ち家と非持ち家が混在する新曽、共同住宅・持ち家が多い下戸田、共同住宅で非持ち家が多い上戸田というように、各地区ごとの性格を読み取ることができよう。

続いて印西市を見ていく（表10）。まず印西は、すでに前節でも紹介した通り、戸田と比べて圧倒的に持ち家比率が高いことがわかる。例外的に低いのは木下・大森・NT中央駅南などだが、それでも数字は7割台である。木下・大森については、前項でも述べた低層共同住宅やアパートの多さが影響していると思われる。ここには個別で示さないが、丁別データで「民営の借家」の数が多い丁を見ると、

「1・2階建て共同住宅」が多い丁と符合している様子がはっきり見て取れる。また、NT中央駅南の非持ち家比率が高くなっているのは、「公営・都市再生機構・公社の借家」が1,530世帯存在するためである（内野1・2、原山1~3、高花1）。公営借家はこの他、小倉台1・4（中央駅北）、原4（牧の原駅）、滝野3（本塙）に立地し、印西市全体（すべてNT地域）で2,103世帯である。

NT地域で戸建比率が（ほぼ）100%である木刈3~7、武西学園台1・3、高花3、また、NTではないが大規模な開発住宅地である平賀学園台2（以上総計1,796戸）に、合わせて163戸の「民営の借家」が存在しているのも見逃せない。これらはいずれも基本的に分譲地であり、購入後になんらかの理

表 11 NT 各丁の戸建／共同住宅世帯比率

		戸建世帯 比率	共同住宅 世帯比率			戸建世帯 比率	共同住宅 世帯比率
中央駅北	小倉台1丁目	0.0%	99.8%	牧の原駅	西の原1丁目	0.0%	100.0%
中央駅北	小倉台2丁目	0.0%	100.0%	牧の原駅	西の原2丁目	34.9%	64.8%
中央駅北	小倉台3丁目	0.2%	99.8%	牧の原駅	西の原3丁目	11.2%	88.6%
中央駅北	小倉台4丁目	0.4%	99.6%	牧の原駅	西の原4丁目	100.0%	0.0%
中央駅北	大塚3丁目	97.4%	1.4%	牧の原駅	原2丁目	0.0%	99.8%
中央駅北	牧の木戸	100.0%	0.0%	牧の原駅	原3丁目	0.0%	100.0%
中央駅北	木刈1丁目	22.3%	77.7%	牧の原駅	原4丁目	0.0%	100.0%
中央駅北	木刈2丁目	70.4%	29.1%	牧の原駅	東の原	100.0%	0.0%
中央駅北	木刈3丁目	100.0%	0.0%	NT印籠	美瀬1丁目	100.0%	0.0%
中央駅北	木刈4丁目	99.7%	0.0%	NT印籠	舞姫1丁目	67.9%	31.2%
中央駅北	木刈5丁目	99.4%	0.6%	NT印籠	舞姫2丁目	14.8%	85.2%
中央駅北	木刈6丁目	96.9%	3.1%	NT印籠	若萩1丁目	39.5%	60.5%
中央駅北	木刈7丁目	100.0%	0.0%	NT印籠	若萩2丁目	100.0%	0.0%
中央駅北	中央北2丁目	1.0%	98.8%	NT印籠	若萩3丁目	100.0%	0.0%
中央駅南	武西学園台1丁目	100.0%	0.0%	NT本埜	滝野1丁目	100.0%	0.0%
中央駅南	武西学園台3丁目	100.0%	0.0%	NT本埜	滝野2丁目	100.0%	0.0%
中央駅南	内野1丁目	0.0%	100.0%	NT本埜	滝野3丁目	0.0%	100.0%
中央駅南	内野2丁目	0.1%	99.8%	NT本埜	滝野4丁目	0.0%	99.6%
中央駅南	内野3丁目	5.6%	94.4%	NT本埜	滝野5丁目	100.0%	0.0%
中央駅南	原山1丁目	50.7%	49.3%	NT本埜	滝野6丁目	100.0%	0.0%
中央駅南	原山2丁目	5.3%	94.7%				
中央駅南	原山3丁目	1.9%	98.1%				
中央駅南	高花1丁目	0.0%	100.0%				
中央駅南	高花2丁目	72.5%	27.5%				
中央駅南	高花3丁目	100.0%	0.0%				
中央駅南	高花4丁目	0.0%	100.0%				
中央駅南	高花5丁目	97.1%	2.9%				
中央駅南	高花6丁目	99.8%	0.2%				
中央駅南	戸神台1丁目	24.7%	75.3%				
中央駅南	戸神台2丁目	15.5%	84.5%				
中央駅南	中央南1丁目	0.0%	100.0%				
中央駅南	中央南2丁目	0.0%	100.0%				

由（子の独立や配偶者との死別により家が「手広」になってしまったための転居や、一時的な転勤など）で賃貸に出されている住宅が一定数あることが想像される。さらに興味深いのは、船穂の武西・戸神・松崎・結縁寺・多々羅田（松崎の 99.2% を除き、すべて戸建比率 100%。計 316 戸）に、52 戸の「民営の借家」が存在することである。これらの丁はいずれも農村地域であるが、（松崎はやや離れているものの）武西学園台・戸神台・内野・高花といった NT 地域に隣接しており、「疑似的 NT」とし

て、一定の借家需要が発生しているのかもしれない。

さて今、印西には戸建比率が（ほぼ）100% の丁が存在すると述べる形となったが、NT 地域には他にも丁内のほとんどすべての住宅が戸建だという丁が存在する。そして一方、丁内のほとんどすべての住宅が共同住宅（団地やマンション）である丁もまた存在している。そこで、NT 地域で住宅が存在する丁の戸建／共同住宅比率を表 11 に示した。住宅が存在する 52 の丁のうち、戸建比率が 9 割を超え

表 12 住民の現居住地での居住年数および 5 年前常住地の地区別比率（戸田市）

	人口総数	1年未満	比率	1年以上 5年未満	比率	5年以上 10年未満	比率	10年以上 20年未満	比率	20年以上	比率
下戸田	38,849	1,988	5.1%	8,157	21.0%	4,651	12.0%	8,210	21.1%	7,020	18.1%
上戸田	32,111	2,407	7.5%	6,199	19.3%	4,725	14.7%	5,998	18.7%	4,597	14.3%
新曽	31,816	2,934	9.2%	7,307	23.0%	4,574	14.4%	5,225	16.4%	3,706	11.6%
笹目	19,394	1,089	5.6%	2,865	14.8%	2,694	13.9%	3,877	20.0%	4,030	20.8%
美女木	13,939	800	5.7%	3,358	24.1%	1,807	13.0%	2,281	16.4%	2,334	16.7%
計	136,150	9,218	6.8%	27,890	20.5%	18,461	13.6%	25,617	18.8%	21,688	15.9%
	常住者	現住所	比率	自市区町村内	比率	県内他市 区町村	比率	他県	比率		
下戸田	38,849	24,119	62.1%	3,173	8.2%	2,508	6.5%	3,671	9.4%		
上戸田	32,111	18,622	58.0%	2,774	8.6%	1,459	4.5%	3,850	12.0%		
新曽	31,816	16,776	52.7%	3,176	10.0%	2,086	6.6%	4,363	13.7%		
笹目	19,394	12,864	66.3%	1,650	8.5%	719	3.7%	1,231	6.3%		
美女木	13,939	8,062	57.8%	1,212	8.7%	1,279	9.2%	1,402	10.1%		
計	136,150	80,480	59.1%	11,986	8.8%	8,052	5.9%	14,519	10.7%		

る丁（数字に濃い網掛け）は 21、うち 15 は戸建比率 100% である。一方、共同住宅比率が 9 割を超える丁（数字に薄い網掛け）は 20、うち 10 が共同住宅比率 100% となっている。残りの 11 が、戸建と共同住宅が比較的混在している丁となるが、数字を見ると、真に拮抗しているのは原山 1（50.7% 対 49.3%）のみである。このように丁ごとに居住形態が画一的になっているのが、（千葉）ニュータウンの特徴と言えるだろう。

（4）人口流動の状況

最後に、人口の流動状況について見ていく。

初めに戸田市における、住民の現居住地での居住年数および 5 年前常住地の地区別比率を表 12 に示した。新曽で居住年数 1 年未満の住民の比率が高く、笹目で 20 年以上の住民の比率が多い。新曽は「10 年以上」の比率が低く、笹目は「1 年未満」「1 年以上 5 年未満」の比率が低いので、前者は新住民の、後者は長期にわたって居住する住民の比率がそれぞれ高い地区と言うことができるだろう。下戸田も、「10 年以上 20 年未満」の比率は最も高く、「20 年以上」も第二位であり、居住期間が長めの住民の比率が高い。ただし下戸田は、「1 年以上 5 年未満」の比率も 2 割を超えており、一定数の新住民の流入が

うかがえる。そこで下戸田の丁別データを見ると、下前 1 の「1 年以上 5 年未満」が市内一高い 44.6% という数値を示し、川岸 1 も 22.4% と高めである。両丁へのマンションの立地についてはすでに言及しているが、とりわけ下前 1 に立地するマンションは 15 階建て 923 戸と規模が極めて大きく、2014 年竣工ということで、ここに一斉に入居した新住民がデータに大きな影響を与えているのである（試みに下前 1 を除外して下戸田の「1 年以上 5 年未満」の比率を計算すると、15.7% まで下降する）。美女木の「1 年以上 5 年未満」の数字が高い数値を示しているのも、複数回触れてきた美女木東 1 と大字美女木のマンション（前者は 2014 年竣工、10 階建て 277 戸。後者は 2012 年竣工、12 階建て 175 戸）が影響していると考えられる。美女木東 1 の「1 年以上 5 年未満」の比率は 40.2%、大字美女木は 33.9% である。

5 年前常住地（のうちの「現住所」の比率）は、当然と言うべきか、居住期間の短さと類似の傾向を示す（新曽で「現住所」の比率が少なく、笹目・下戸田で多い）が、一点注目したいのは、5 年前の居住地が「自市区町村内」、すなわち戸田市内で転居をした住民の比率は、新曽が抜け出しているものの、他の 4 地区では軒並み同水準であり、市内転居者が市域に比較的万遍なく散らばっていると推測される

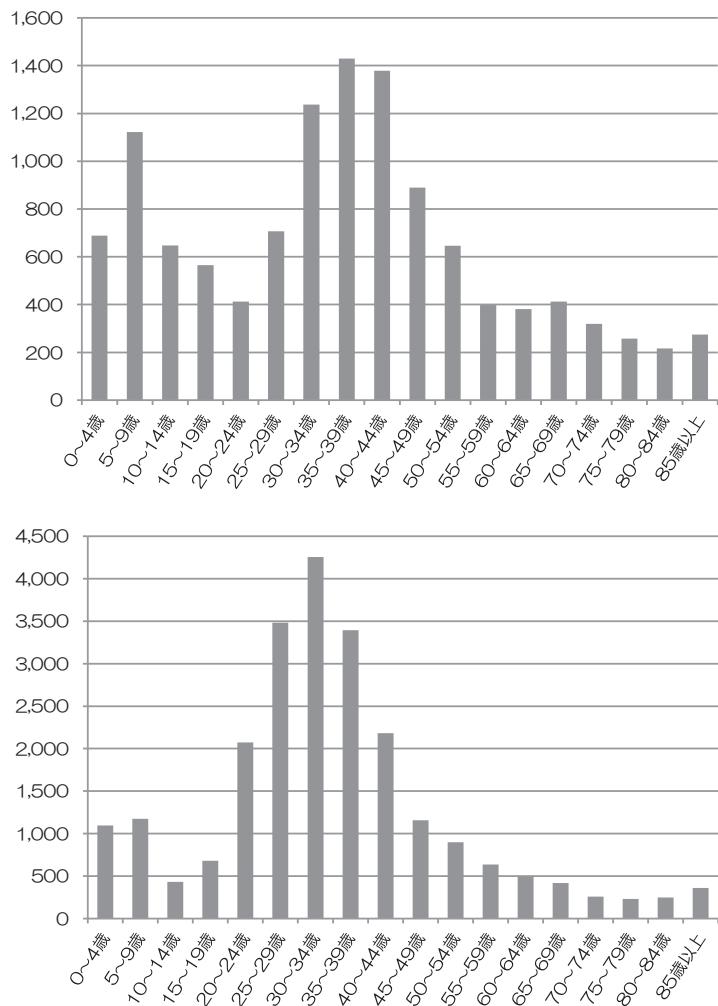
ことである。丁別データを見ると、新曽4の19.0%という数字が突出しているが、これは丁内に立地する高齢者施設への入居者が関係しているかもしれない。

関連して、丁別ではなく市全体のデータだが、市内転居者と県内他市町村および県外からの転入者の年齢5歳階級別人数を図13に示した。市内転居者では30歳から44歳に、転入者には25歳から39歳までにピークがあるが、それよりも特徴的なのは、市内転居の方では5~9歳にもピークがあることだろう。明瞭に言い切ることはできないが、子どもを持つ家族が、住み替えのために市内転居をしている可能性が見て取れる。

もう一つ、住民の勤務先・通学先を見ておく(表13)。地区別の傾向がはっきり出ているのは、笛目と美女木(とりわけ笛目)において(自宅を含む)市内従業者が多いこと、下戸田・上戸田・新曽では「他県」(おそらく東京都)での従業が多いこと、美女木では県内他市(おそらくさいたま市)での従業が多いことなどである。通学者の方もやはり、笛目・美女木で市内、下戸田・上戸田・新曽で「他県」という傾向が見られるが、従業者はほどはっきりしたものではない。

丁別に見ると、「他県で従業」の数字が大きい丁には、新曽南1・3、本町2・3・4・5、下前1・2、南町、川岸3など、埼京線の戸田公園駅・戸田駅・北戸田駅(のうち、とりわけ戸田公園駅)への無理のないアクセスが可能な丁が並んでいる。市内従業者の比率が高い笛目・美女木の中で例外的に県外従業者の多い笛目北町・美女木東1・大字美女木は、(地区内の他地区と異なり)いずれも北戸田駅からさほど遠くない距離にある。対して笛目や美女木は市の西部にあって、さいたま市(旧浦和市)に隣接し、鉄道駅から遠く、さらに丁によっては新大宮バイパスや東京外環道よりも「外側」になるため、東

図13 市内転居者(上)と県内他市町村および他県からの転入者(下)の年齢5歳階級別人数(戸田市)



京都への(鉄道による)通勤を考える人々の居住先としては選ばれにくいのである。なお下戸田には、「県内他市区町村で従業」の比率が丁別平均(16.8%)を超える丁も8つある(喜沢1・2、喜沢南1・2、中町1・2、下戸田1・2)。これには、市の東部に位置し、蕨市や川口市に隣接、場所によっては京浜東北線西川口駅に無理なくアクセスでき、国道17号(中山道)が近いという地理的な条件が関係していると考えられる。

次に印西市の状況を見ていきたい。データは表14に示した。居住1年未満および1年以上5年未満の比率が圧倒的に高いのは船穂であるが、丁別データを見ると、(既述のとおり)宅地開発が進み、

表 13 住民の地区別勤務先・通学先（戸田市）

	15歳以上就業者数	自宅で従業	比率	自宅外の自市区町村で従業	比率	県内他市区町村で従業	比率	他県で従業	比率
下戸田	18,628	1,116	6.0%	4,246	22.8%	3,517	18.9%	8,327	44.7%
上戸田	16,329	983	6.0%	3,742	22.9%	2,221	13.6%	8,074	49.4%
新曾	15,534	837	5.4%	4,038	26.0%	2,372	15.3%	7,040	45.3%
笹目	9,575	854	8.9%	3,933	41.1%	1,611	16.8%	2,464	25.7%
美女木	6,905	458	6.6%	2,284	33.1%	1,694	24.5%	2,123	30.7%
計	66,972	4,248	6.3%	18,244	27.2%	11,415	17.0%	28,028	41.9%
	15歳以上通学者数			自市区町村へ通学	比率	県内他市区町村へ通学	比率	他県へ通学	比率
下戸田	2,020			299	14.8%	691	34.2%	887	43.9%
上戸田	1,676			255	15.2%	537	32.0%	779	46.5%
新曾	1,689			246	14.6%	561	33.2%	774	45.8%
笹目	982			202	20.6%	379	38.6%	361	36.8%
美女木	615			117	19.0%	270	43.9%	198	32.2%
計	6,982			1,119	16.0%	2,438	34.9%	2,999	43.0%

表 14 住民の現居住地での居住年数の地区別比率（印西市）

	人口総数	1年未満	比率	順位	1年以上5年未満	比率	順位	5年以上10年未満	比率	順位	10年以上20年未満	比率	順位	20年以上	比率	順位
木下	6,502	305	4.7%	5	765	11.8%	9	969	14.9%	6	1,157	17.8%	5	2,162	33.3%	7
小林	7,355	262	3.6%	8	890	12.1%	8	892	12.1%	7	1,443	19.6%	4	2,968	40.4%	1
大森	5,501	243	4.4%	6	736	13.4%	6	480	8.7%	9	649	11.8%	9	2,106	38.3%	2
永治	1,425	30	2.1%	11	105	7.4%	11	63	4.4%	12	158	11.1%	10	524	36.8%	4
船穂	5,441	797	14.6%	1	1,374	25.3%	1	593	10.9%	8	410	7.5%	12	1,120	20.6%	9
NT中央駅北	13,720	551	4.0%	7	2,741	20.0%	3	2,286	16.7%	5	2,268	16.5%	7	4,729	34.5%	6
NT中央駅南	19,557	1,557	8.0%	3	3,597	18.4%	5	4,503	23.0%	2	3,345	17.1%	6	4,729	24.2%	8
NT牧の原駅	10,986	714	6.5%	4	2,567	23.4%	2	2,364	21.5%	4	2,849	25.9%	3	1,422	12.9%	10
印旛	8,868	820	9.2%	2	805	9.1%	10	560	6.3%	10	1,119	12.6%	8	3,208	36.2%	5
NT印旛	4,827	131	2.7%	10	889	18.4%	4	1,361	28.2%	1	1,919	39.8%	2	16	0.3%	12
本塙	3,506	54	1.5%	12	224	6.4%	12	168	4.8%	11	366	10.4%	11	1,323	37.7%	3
NT本塙	4,982	146	2.9%	9	611	12.3%	7	1,104	22.2%	3	2,689	54.0%	1	53	1.1%	11
計	92,670	5,610	6.1%		15,304	16.5%		15,343	16.6%		18,372	19.8%		24,360	26.3%	

人口が急増している草深の影響が大きい。草深を外して計算すると、「1年未満」は2.8%、「1年以上5年未満」は11.6%である。また、「1年未満」の比率の第2位は印旛であるが、これは1年制の学生寮を有する大学が立地する平賀学園台1（「1年未満」は実に93.0%）の影響が大きく、これを除くだけで比率は4.4%となる。

20年以上比率の上位は小林、大森、本塙、永治、印旛と非NT地域が続く。船穂は20.6%と低い数

字だが、やはり草深を外して算出してみると34.5%となる。木下も、新興住宅街である木下南1・2、木下東1の存在を背景に、順位的には7位であるが、それでも比率は3割を超えている。農村部はやはり長期居住者の比率が多い=人口流動が小さいと言えるだろう。

それに対してNT地域は、文字通り新規に拓かれた街であるがゆえ、開発された時期とそこの住民の居住年数に強い関係がある。1984年から入居が

表 15 居住年数と 2010~15 年の住宅増減数（印西市の特徴的な丁）

	1年末満	1年以上 5年末満	5年以上 10年末満	10年以上 20年末満	20年以上	2010→15 住宅増減
小倉台1丁目	5.0%	14.7%	11.5%	20.9%	40.9%	19
小倉台4丁目	8.9%	15.0%	21.0%	18.2%	28.4%	27
内野1丁目	4.0%	15.8%	13.1%	19.3%	38.5%	-65
原山3丁目	7.4%	19.0%	14.1%	19.6%	31.2%	24
高花1丁目	9.5%	21.3%	17.1%	15.3%	26.3%	-12
高花2丁目	7.0%	20.4%	25.7%	35.3%	3.0%	-4
原4丁目	7.1%	16.5%	12.1%	53.4%	2.5%	-9
滝野3丁目	6.4%	14.9%	15.2%	54.0%	1.3%	6

表 16 住民の 5 年前常住地の地区別比率（印西市）

	常住者	現住所	比率	順位	自市区 町村内	比率	順位	県内他 市区町村	比率	順位	他県	比率	順位
木下	6,502	5,323	81.9%	5	347	5.3%	5	274	4.2%	10	242	3.7%	9
小林	7,355	6,117	83.2%	4	342	4.6%	6	421	5.7%	6	217	3.0%	10
大森	5,501	4,407	80.1%	7	383	7.0%	2	252	4.6%	9	230	4.2%	8
永治	1,425	1,301	91.3%	2	29	2.0%	11	38	2.7%	12	14	1.0%	12
船穂	5,441	3,325	61.1%	12	559	10.3%	1	935	17.2%	1	437	8.0%	4
NT中央駅北	13,720	10,502	76.5%	9	630	4.6%	7	1,278	9.3%	4	1,041	7.6%	5
NT中央駅南	19,557	14,435	73.8%	10	1,110	5.7%	4	1,612	8.2%	5	1,597	8.2%	3
NT牧の原駅	10,986	7,804	71.0%	11	645	5.9%	3	1,186	10.8%	2	1,027	9.3%	2
印旛	8,868	7,253	81.8%	6	163	1.8%	12	507	5.7%	7	842	9.5%	1
NT印旛	4,827	3,839	79.5%	8	172	3.6%	8	474	9.8%	3	277	5.7%	6
本塙	3,506	3,239	92.4%	1	90	2.6%	10	105	3.0%	11	39	1.1%	11
NT本塙	4,982	4,265	85.6%	3	147	3.0%	9	244	4.9%	8	215	4.3%	7
計	92,670	71,810	77.5%		4,617	5.0%		7,326	7.9%		6,178	6.7%	

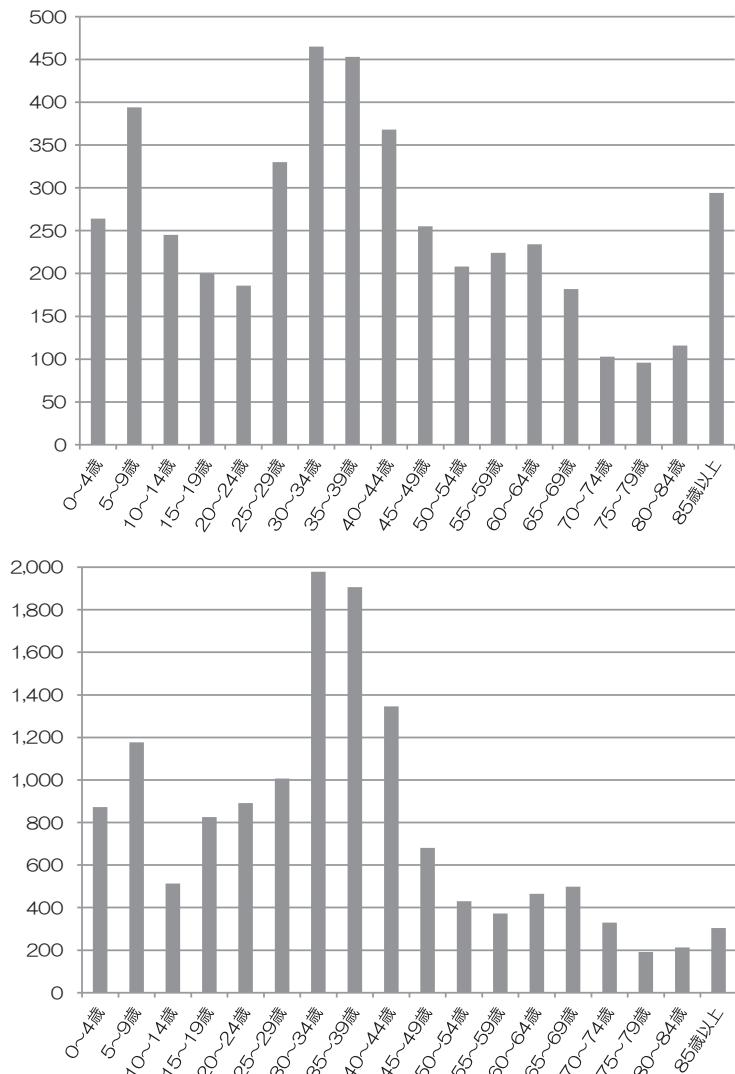
始まっている中央地区のうち、中央駅北の「20年以上」が 34.5% と頭一つ抜けており（全体でも第 6 位）、中央駅南も 24.2% にのぼる。対して NT 印旛・NT 本塙には 20 年以上居住者はほぼ存在しない（それもそのはずで、両地区の入居開始はそれぞれ 2000 年、1997 年である⁹⁾）。牧の原駅地区は 1994 年から入居が始まったが、2000 年代末から 2010 年代にマンションや分譲地が開発された丁（原 3、西の原 4、東の原など）もあり、地区単位で見ると、どの居住期間別にも比較的万遍なく住民が分布している。

もう一点注目したいのは、同じようにどの居住期間別にも比較的万遍なく住民が分布している（「1

年未満」「1 年以上 5 年未満」という短期居住者と、「10 年以上 20 年未満」「20 年以上」という長期居住者の比率がいずれも丁別平均値を超える）NT 内の丁のうち、2010 年から 2015 年の間の住宅数の増数が少ない（データは 2010 年と 15 年の国勢調査によった）丁である。該当する丁のリストを表 15 に示した。住宅数がさほど増えていない、あるいは減っているにもかかわらず、居住期間「1 年未満」「1 年以上 5 年未満」の住民が相当数存在するということは、NT で広く見られる「新築物件に（一斉に）入居」という転入形態ではなく、中古住宅への転入が存在するということであろう。

表 16 は住民の 5 年前常住地の地区別の比率であ

図 14 市内転居者（上）と県内他市町村および他県からの転入者（下）の年齢 5 歳階級別人数（印西市）



る。「現住所」の比率が全体的に戸田より高く、どの地区でも 7 割を超える（とりわけ、農村部で人口流動が小さいという上述の知見と符合し、非 NT の地区では 8 割を超えていた）。例によって草深の影響が大きい船穂のみは 61.1% と出ているが、草深を除いて算出すれば 85.0% という数字になる。

印西におけるヒアリングでは、非 NT 地域の住民（子世代）が結婚などを機に NT や「近場の戸建」に移り住み、いわゆる「近居」を選択する若者世代が多いという旨が、複数人から語られた。ただ、数字の上で見れば、印西の「自市区町村内」=

市内転居の比率は戸田のそれより低い。地区別で船穂のみが突出して高いのは、やはり草深の影響（草深を除くと 6.4%）である。

丁別データを見てみると、最も比率が高いのは西の原 4 で、実に人口の 30.0% が市内転居者である。武西学園台 3 の 27.7% も高い数字である。2 割台だと大廻の 23.5%、武西の 20.9% があるが、両丁とも特養が立地しており、その影響が大きいと思われる。その次は草深の 12.2% であるが、実は草深にも特養が立地している。

戸田の丁別平均値 8.5% に匹敵する丁は他に 7 丁あり、中央北 2・原山・若萩 1・原 3 は NT、小林大門下 2・木下南 1 は非 NT の開発住宅地である。浦幡新田は人口の少ない（91 人）農村部の丁であるが、アパートが立地しており、ここへの居住者かもしれない。ともあれ基本的に、NT や非 NT の開発住宅地が市内転居者の受け皿になっていると言つてよいだろう。

戸田市と同様、印西市の市内転居者と県内他市町村および県外からの転入者の年齢 5 歳階級別人数を図 14 に示した。やはり印西でも 30 歳代とその前後の世代と合わせて 5~9 歳が市内転居者の一つのピークをなしており、（上述のヒアリングの内容を裏付けるように）ファミリー層の市内転居が一定数あることをうかがわせる。

最後に勤務先・通学先である（表 17）。自宅従業者は NT 地区で明確に低く、非 NT 地区、とりわけ開発住宅地を持たない地区において高いという傾向がはっきりと表れている。それに比べて、市内従業者の比率は地区ごとにさほど差がなく、NT／非 NT で明瞭な傾向を見い出しつづく。「県内他市区町村で従業」の比率は、印旛が 43.6% で頭一つ抜けている。これは、印旛が市域の南東に位置し、佐

表17 住民の地区別勤務先・通学先（印西市）

	15歳以上就業者数	自宅で従業	比率	順位	自宅外の自市区町村で従業	比率	順位	県内他市区町村で従業	比率	順位	他県で従業	比率	順位
木下	3,378	333	9.9%	6	1,274	37.7%	1	1,029	30.5%	7	563	16.7%	7
小林	3,657	244	6.7%	7	1,190	32.5%	3	1,293	35.4%	2	799	21.8%	6
大森	2,574	390	15.2%	5	933	36.2%	2	832	32.3%	3	288	11.2%	9
永治	859	220	25.6%	1	254	29.6%	6	243	28.3%	9	65	7.6%	12
船穂	2,613	557	21.3%	3	742	28.4%	9	826	31.6%	5	397	15.2%	8
NT中央駅北	6,805	278	4.1%	8	1,775	26.1%	12	1,794	26.4%	12	2,806	41.2%	1
NT中央駅南	9,540	370	3.9%	9	2,910	30.5%	5	2,841	29.8%	8	3,187	33.4%	5
NT牧の原駅	5,657	165	2.9%	11	1,655	29.3%	8	1,568	27.7%	11	2,118	37.4%	4
印旛	4,172	731	17.5%	4	1,131	27.1%	10	1,821	43.6%	1	333	8.0%	11
NT印旛	2,137	56	2.6%	12	563	26.3%	11	654	30.6%	6	824	38.6%	2
本塙	1,798	430	23.9%	2	571	31.8%	4	576	32.0%	4	147	8.2%	10
NT本塙	2,472	76	3.1%	10	725	29.3%	7	686	27.8%	10	926	37.5%	3
計	45,662	3,850	8.4%		13,723	30.1%		14,163	31.0%		12,453	27.3%	
	15歳以上通学者数				自市区町村へ通学	比率	順位	県内他市区町村へ通学	比率	順位	他県へ通学	比率	順位
木下	308				67	21.8%	9	146	47.4%	7	69	22.4%	6
小林	384				60	15.6%	11	192	50.0%	4	118	30.7%	3
大森	243				73	30.0%	3	107	44.0%	9	52	21.4%	8
永治	66				20	30.3%	2	32	48.5%	5	10	15.2%	11
船穂	196				49	25.0%	5	99	50.5%	3	42	21.4%	7
NT中央駅北	750				95	12.7%	12	318	42.4%	11	323	43.1%	1
NT中央駅南	998				280	28.1%	4	438	43.9%	10	253	25.4%	5
NT牧の原駅	693				135	19.5%	10	323	46.6%	8	215	31.0%	2
印旛	1,126				790	70.2%	1	236	21.0%	12	89	7.9%	12
NT印旛	426				93	21.8%	7	237	55.6%	2	89	20.9%	9
本塙	142				31	21.8%	8	80	56.3%	1	28	19.7%	10
NT本塙	563				127	22.6%	6	270	48.0%	6	149	26.5%	4
計	5,895				1,820	30.9%		2,478	42.0%		1,437	24.4%	

倉市・酒々井町・成田市に隣接していることが関係していると思われる。丁別データを見ると、開発住宅地である平賀学園台2・3が59.6%、67.1%と突出して高い数字を示している。

「県内他市区町村で従業」が2番目に高い小林は、地区内12丁のうち実に11丁で丁別平均値(31.2%)を超えており、この地区にはJR成田線の小林駅が立地しており、これを利用して下り方面の成田市・栄町、上り方面の我孫子市・柏市などへの通勤が一

定数あるものと推測される。大森や木下も、成田線の木下駅からの同様の通勤流動が考えられる。

他県従業者の比率は、NTにおいて高(く)、農村部において低(い)という明確な傾向がある。NT地域にとっての「他県」は、ほとんど東京都であろう(利根川の向こうの茨城県や、東京都をさらに超えた神奈川県への通勤は、可能性がないわけではないが、大きな数字にはならないだろう)。印旛日本医大駅・印西牧の原駅・千葉ニュータウン中央駅から

北総鉄道を利用し、都内に向かっていると考えられる。

通学者については、県立学校に通学する高校生が多いためか、ほとんどの地区において「県内他市区町村へ通学」が最も高い数字を示す。例外は、わずかに「他県へ通学」が勝る中央駅北と、地域内の大学や専門学校への寮からの「通学」が影響して「自市区町村へ通学」が圧倒的な数字となっている印旛のみである。

※本論文は、日本学術振興会の科学研究費補助金（課題番号16H03585）を受けて行った研究成果の一部である。

注

- 1) 本稿は、1・3を川手が、2を小石川が主に執筆した。
- 2)『平成29年度市民意識調査報告書』、印西市、2018年。
- 3)『朝日新聞』2009年9月28日朝刊・ちば首都圏版。
- 4)戸田市・人口統計速報(<https://www.city.toda.saitama.jp/site/opendata/jinkou-2017.html>)
- 5)千葉県年齢別・町丁字別人口平成29年度(<https://www.pref.chiba.lg.jp/toukei/toukeidata/nenreibetsu/h29/h29-index.html>)
- 6)ただし、同国勢調査において移動状況が「不詳」であるのは、戸田市が20,166人に対して、印西市は2,200人であり、戸田市がひときわ高い点は留意する必要がある。
- 7)注6でもすでに一部言及されているとおり、2015年の国勢調査の結果においては、調査項目により「不詳」が相当数に上っている場合が散見され、一般的に戸田市の方が印西市よりもその数字が大きい。以下本節では、「不詳」については取り扱わないこととするが、これによってデータが大なり小なり歪んでいる可能性があることに注意されたい。
- 8)各地区に含めた大字・丁目は次の通り。

【戸田】

下戸田：喜沢・喜沢南・中町・下戸田・下前・川岸（1丁目・2丁目）
上戸田：川岸（3丁目）・本町・南町・戸田公園・上戸田・大字上戸田

新曾：新曾南・氷川町・大字新曾・大字下笛目
笛目：笛目南町・笛目北町・早瀬・笛目

美女木：美女木・美女木東・大字美女木

【印西】

木下：木下・木下南・竹袋・別所・宗甫・木下東・平岡
小林：小林・小林北・小林浅間・小林大門下

大森：大森・鹿黒南・鹿黒・亀成・發作
永治：浦部・浦部村新田・白幡・高西新田・浦幡新田・小倉・和泉
船穂：武西・戸神・船尾・松崎・松崎台・結縁寺・多々羅田・草深・泉
NT 中央駅北：小倉台・大塚・泉野・牧の木戸・木刈・中央北
NT 中央駅南：武西学園台・内野・原山・高花・戸神台・中央南
NT 牧の原駅：西の原・原・東の原・牧の台
印旛：瀬戸・山田・平賀・平賀学園台・吉高・萩原・松虫・岩戸・師戸・鎌苅・大廻・造谷・吉田
NT 印旛：美瀬・舞姫・若萩
本塙：中根・荒野・角田・竜腹寺・滝・物木・笠神・下曾根・萩塙・松木・安食ト杭・将監・本塙小林・酒直ト杭
NT 本塙：滝野
なお、戸田市にはどの地区にも属させがたい「堤外地」に41人の住民がいるが、本節の分析においては除外している。
9) ゆえに、そもそも調査時点の2015年現在で20年以上居住者が存在することは本来考えにくいのだが、この点はとりあえず置いておく。

参考文献

- 戸田市編『戸田市史』通史編下、戸田市、1987年
戸田市教育委員会編『戸田市史 昭和から平成へ』、戸田市、2016年
埼玉県総務部地方課編『埼玉県市町村合併史』、埼玉県、1962年
印西市教育委員会編『印西市歴史読本』近代・現代編、印西市教育委員会、2011年
本塙村教育委員会編『本塙の歴史 印旛沼に育まれたある農村の物語』、本塙村教育委員会、2008年
印旛村史編さん委員会編『印旛村史』通史II、印旛村、1990年
印西市行政管理課編『新「印西市」誕生 印西市・印旛村・本塙村合併の記録』、印西市行政管理課、2010年
千葉県地方課編『千葉県市町村合併史』、葵書房、1957年
千葉県総務部市町村課編『千葉県市町村合併史 平成の市町村合併の記録』第2版、千葉県、2010年
千葉ニュータウン25周年記念事業実行委員会編『ラーパン千葉21 人間文化圏をめざして 千葉ニュータウン25周年記念誌』、千葉ニュータウン25周年記念事業実行委員会、1995年
千葉県企業庁・都市再生機構首都圏ニュータウン本部千葉業務部編『千葉ニュータウン事業記録 late stage 1995-2015』、千葉県企業庁、2016年